

第三百五回 青葉会

平成二十三年八月二十五日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

伊賀山そらお 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太
小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 橋口隆 福島正明 山崎亜也 山内天牛
小早健介(新人) 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中山芳博 古田昇 南平和夫 宮内規雄
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子 山崎青史

《選者吟》

あの夏の我ら愛国挺身隊

奥巡りねぶたにねぶた立佞武多

秋暑く暈月赤し余震また

中元の贈り先無き加齢かな

雨戸繰る途端に蟬のぶつかり来

ゴシックは選者の天

万里子 (隆・允・正)

全 (弘)

全 (恭)

全

全

《互選句》

八点

夏掛けも枕も蹴りて子ら寝入り
海霧(じり)匂ふ浦に一つの赤提灯

(青↓「句ふ」が卓抜)

そらお (清・忠・弘・敏・隆・允・く・天)

一灯 (恭・孤・龍・ゆ・允・く・青)

六点

☆ 新盆やメールドレス削除せり
グラス打つ銀のマドラー夜半の秋
背に負ひし姉やは傘寿赤とんぼ
☆ 診察の医者蟬の名を尋ねけり

(青↓「診察医蟬の名前を」とすると調子が整うのでは)

忠彦 (万・そ・猛・孤・敏・二)

一灯 (堅・そ・猛・孤・ゆ・く)

昇 (堅・そ・ゆ・一・隆・く)

天牛 (万・忠・隆・正・亜・青)

五点

☆ 遠雷やぢぢの手強く握りしめ
☆ 秋日傘急ぐ花街(かがい)の石畳
(青↓「はなまち」なら「の」をとった方がいい)

五郎太 (万・そ・敏・允・天)

一灯 (万・堅・紀・亜・青)

隆 (万・堅・紀・恭・ゆ)

正明 (堅・清・猛・五・亜)

紀久男 (万・そ・敏・二)

ゆたか (万・龍・敏・天)

正明 (孤・五・弘・天)

紀久男 (ゆ・正・亜)

忠彦 (一・正・青)

三点

幕間(まくあひ)に舞妓ぞろぞろ秋暑し
青田ゆく津軽の電車手動ドア
(青・・・のどかな景が見える)
新涼や天井高き古ホテル
走り込み軒借る白雨そばのれん
クルーズの霧笛のかなた島眠る
竿の蔓殊に色濃き終戦日
(甘藷)

弘子 (そ・允・く)

ゆたか (恭・弘・龍)

全 (清・孤・二)

全 (五・正・亜)

☆ レクイエム絶唱百人夏終る

二点

水槽の水母になりたやこの暑さ
夏旺(さか)ん童(わらべ)は親を駆り立てる
秋立つや蛇屋の蛇の知らぬ風
(青↓下五「知らんぶり」がいい)

堂哉 (万・敏・く)

そらお (猛・亜)

猛 (恭・龍)

弘子 (隆・青)

一点

☆ ☆ 冷やし中華は譲れぬ胡瓜買はな
 炎暑を行く芭蕉の健脚思ひつつ
 曝書より褪せしひばりのプロマイド
 ☆ 秋風や何処かに隠れてゐる野性
 ☆ 秋風や峠に出れば下る丈
 朝霧や加茂川浴いを大学へ

(青・市民大学だるうか？爽やかな景)

スリツパを枕に犬の昼寝かな
 かなかなの今日をかぎりの嗚咽かな
 盆の月病みたる友に思ひ寄せ
 秋刀魚くる船失ひし顔曇る
 何もせず暑し暑しの余生かな
 はんなりと上方舞の床(ゆか)涼み
 開国の下田港や秋さやか
 幕末の悲喜閉ぢ込めし秋の浜
 吾が吟に鯛(ひぐらし) 同調喧(かまびす)し
 炎昼や観る映画八甲田山
 奥入瀬を行列でいく夏休み
 日焼けした車夫客を待つ雷門
 汚染避け河童逃げしか天の川

(☆↓銀漢へ放射能から河童逃げ)

☆ 抱いて寝たしと思ひて久し竹(ちく)夫人
 カテール受け容れし兄夏蒲団
 虫の音に誘はれ迎る散歩道
 板堰を滑る湧水処暑の風
 お互ひを生き御魂としてかしづけり
 秋風来魚影とともに川浴ひに
 秋暑し消去法しかない政治
 鬼灯市今年も朝摘み持ち帰り
 秋涼し木造モルタル二階建
 井戸水と洗濯槽で西瓜冷え
 鈴虫を飼ふ甕深く詞藻汲む
 軽井沢の土産はセンチコガネムシ
 (ふんころがし)
 縄文から未来へ繋ぐ稲の波

弘子(紀・正)
 惠洲(堅・五)
 一灯(万・ゆ)
 正明(万・弘)
 全(五・龍)
 規雄(紀・青)

天牛(清・二)
 盛雄(清・猛)

清(紀)

全(猛)

そらお(忠)

紀久男(そ)

恭延(弧)

全(敏)

全(龍)

全(忠)

忠彦(弘)

弘子(天)

健介(紀)

惠洲(万)

堂哉(天)

ゆたか(清)

一灯(龍)

芳博(五)

全(恭)

正明(紀)

和夫(紀)

亜也(忠)

全(忠)

全(紀)

天牛(紀)

盛雄(紀)

●次回青葉会

九月二十二日(木) 午後六時〜九時 コンチエルト「談話室」
 十月二十七日(木) 全
 十一月二十四日(木) 全
 ▲当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責

紀久男

一、今回は万里子先生以下15名出席。投句は8名。

先生寄贈のどら焼き（吉祥寺・茂蔵。おから入り）弘子さんの饅頭（鶴屋吉信「紡ぎ詩」）を配り
亜也さんいつもの「大信州」純米大吟醸を賞味しつつ、社友会ホームページ掲載・龍平さんの
「私と外国語」を回覧。六ヶ国語をマスターされた龍平さんには敵いませんが、当会には天牛さんを
始めフランス語に強い面々がおられます。正明さんは最近アルペール・カミュの「ペスト」原書を
読み了えた由です。全員揃った所で、弘子さんの還暦、そらおさんの古希を祝って乾杯！

熊谷國男さん（日本鋼管OBで小生とアヴァンテイスタツフで同僚。俳誌「一葦」同人）より・
寄贈の「八海山」純米吟醸（一升壺）。

弘子さんの好テンポの司会でご覧のようにそらおさん、一灯さん、忠彦さん、天牛さんが
好成绩でした。終了後、忠彦さんから6名が三幸園へ繰出しました。その3日後、忠彦さん
心筋梗塞で救急車。目下入院中です。詳細後報します。

二、関係者近詠

鳩の掘る栗鼠の隠し餌梅雨晴間 万里子 夏潮に乗りて船脚飛ぶごとく 允章
西日負ひ背筋露はな抜毛猿 全 新涼やベンチに小さき旅靴 全

賛美歌のルフラン強し蔦茂る 眞希子 をちこちに蟬の骸や夏の果 全

父の日や父は無休の介護職 全 足とどむ今年最初のカナカナに 恵洲

受洗わが初聖餐や聖霊祭 全 戦死者の子らも老いつつ敗戦忌 全

緑陰の雀に無害を見抜かるる 弘子 足で描きしヨツト波切る勢いかな 全

ずぶ濡れの安田講堂額の花 全 奈良墨の老舗の暖簾風光る 堂哉

お喋りのアマリリスには言へぬこと 全 石舞台岩間の小さき秋の空 全

殺し場に掛け声通る夏芝居 紀久男 広ろびると明日香暮れゆく木守柿 全

玉紫陽花友退院のメールあり 忠彦 以上「扉俳句会」新人賞受賞

二杯まで騙しすかされ生ビール 全 県境の關の深さや流れ星 允章

大地震我聞せずのざうり虫 和夫 夏ゆくや日ごとに空の紺深み 全

梅雨空からパサと鴉の急降下 全 せせらぎの囁くごとく天の川 全

以上「萬緑」九月号より 長考やいつしか止みし遠花火 堂哉

汗拭ふ指揮者少しく瘦せにけり 全

滝川の魚影鋭く失せにけり 全

この星の不況は秋を好むとか 健介

（☆↓此度また地球不況の秋となり）

三、面白かった句集 近刊より

「桂米朝句集」岩波書店2011・7・21千九百円

はるの雪誰かに電話したくなり

法善寺ぬけて帰ろうはるの雨

うちの子でない子がいてる昼寝覚め

和田誠「五・七・五交遊録」白水社2011・6・25 二千三百円

小沢昭一・渥美清・岸田今日子・岩城宏之らの作品と自句

鬼火舞ふ峠もありて冬の旅（岩城宏之への追悼句）

平成二十三年九月九日

紀久男 記 以上